



**Data** 2026-3  
監督：沙漠（シャー・モー）  
出演：张艺兴（チャン・イーシン）  
／李璐安（リー・ルオアン）

## 👁️👁️ みどころ

『コーダ あいのうた』（21年）の大ヒットによって、「コーダ」とは「Child of Deaf Adults」の略語で、「ろう者の親を持つ子供のこと」であることが周知された。そのためか、近時、ろう者を主人公にした感動作が多い。『ブラザー 富都（ブドウ）のふたり』（23年）や本作と同時期に公開された『ぼくの名前はラワン』（22年）がそれ。そして、「中国で初登場1位！ 世界各国続々公開、世界中を愛に満ちた涙で包み込む、2026年最初の感動作！」もそれだ。

弁護士歴51年の私は、親権を巡る裁判を何度も扱ったが、そこでは子供の意思をどう判断するかが難しい。しかし、本作を見れば、いかに父娘の絆が強くとも、「私がいなければパパはお金が稼げない」と7歳の娘が小学校にも通わず、ろう者のコミュニティで父親を支えている生活はダメ。離婚した母親が、「娘に普通の生活させたい」と引き取りに戻ってくると・・・。

親権を巡る裁判で勝つためには優秀な弁護士が必要！ そのためには費用が必要！ 中国には誠実な弁護士が少なく、カネで動く弁護士が多いことが本作を見ればよくわかるが、ろう者ながら車の運転ができる父親はそこで巧妙な誘いになり、保険金詐欺のグループへ！ そんな汚れた金で親権を守るのは根本から間違いだが、映画としては劇的かつスリリングだ。しかし、親権を奪われた上、保険金詐欺が露見した父親が手話通訳を介した刑事法廷に臨むと・・・。

私は何度も刑事事件における司法通訳の重要性を痛感したが、手話通訳を必要とするろう者の刑事裁判ではその重要性はより高い。本作冒頭には、本作のストーリーと関係のない手話通訳の女性が登場し、窃盗の嫌疑で取り調べを受けるろう者に対して、必死に「罪を認めたら取り返しがつかない。私がついてい」と語りかけるが、この手話通訳の女性は一体ダレ？

ハイライトのシーンでどっと涙が溢れ出すこと確実な本作をじっくり味わいたい。そうすれば、必ずしも「世界中を愛に満ちた涙で包み込む、2026 年最初の感動作！」のうたい文句が誇張でないことに納得できるはずだ。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■「コード」とは？なぜ本作が2026年最初の感動作に！■□■

2021年2月の第94回アカデミー賞は、村上春樹の原作を濱口竜介監督が映画化した『ドライブ・マイ・カー』（21年）（『シネマ49』12頁）が作品賞、監督賞、脚色賞、国際長編映画賞にノミネートされていた。その上、『ナイトメア・アリー』（21年）（『シネマ50』31頁）や『ドント・ルック・アップ』（21年）（『シネマ50』35頁）、『DUNE/デューン 砂の惑星』（21年）（『シネマ50』38頁）等の有力候補があったため、私は『コード あいのうた』（21年）を勝手に「お涙ちょうだい映画」と決めつけ、鑑賞対象から外していた。ところが、私の予想は大外れて、『コード あいのうた』が作品賞、助演男優賞、脚色賞の3部門をゲットしたからビックリ！

そこで同作を鑑賞した結果、「コード」とは「Child of Deaf Adults」の略語で、「ろう者の親を持つ子供のこと」と初めて知ること。そして、同作の「みどころ」では、「後半からクライマックスにかけて大粒の涙が」、「やっぱり、こりゃ必見だった！」と書いた（『シネマ50』12頁）。

そんな私にとって、チラシ上に「中国で初登場1位！世界各国続々公開、世界中を愛に満ちた涙で包み込む、2026年最初の感動作！」と書かれている本作は必見！もっとも、本作も、当初は単なる「お涙ちょうだい映画」かも？との思いも持っていたが・・・。

## ■□■導入部のショートストーリーに注目！■□■

本作で聴覚障がいを持つ父シャオマー（小马）を演じたのは、世界的なアイドルグループ「EXO」で活躍する张艺兴（チャン・イーシン）。チラシには、「幼い娘の幸せだけを願ひ必死に駆けずり回るシングルファーザーの姿が観る者の心を激しく揺さぶる。」と書かれている。他方、父親とともにろう者のコミュニティで暮らし、「私がいないとパパはお金を稼げない」と考え、小学校にも通わずに父親を支える7歳の娘ムーム（木木）役を演じるのは李珺安（リー・ルオアン）だ。したがって、チラシの表にはそんな娘を肩車した父娘の姿が、裏には公園のブランコに乗る娘を押しながら楽しそうに遊ぶ父娘の姿が写し出されている。なるほど、なるほど・・・。

ところが、本作導入部ではまず、勤務先で窃盗の罪に問われ、警察で取り調べを受けているろう者の女性が登場するので、アレレ、アレレ・・・。彼女は必死に無罪を主張しているようだが、取り調べ担当の警察官に彼女の手話が全く通じないのは当然だ。そこに登場してくる手話通訳の女性はそんな彼女（被疑者）の弱い立場をしっかりと理解しているらしく、必死に「罪を認めたら取り返しがつかない。私がついている」と語りかけ、献身的

に向き合っていたが、導入部のこのショートストーリーは一体ナニ？そして、このろう者の被疑者にトコトン寄り添い、励まし続けている手話通訳の女性は一体ダレ？

私は弁護士登録後 5 年間は刑事弁護をたくさんやっていたし、無罪判決を 5 件獲得しているから、そりゃ素晴らしいもの。また、2001 年の初めての中国の大連旅行以降は、友人となった留学生に法廷通訳を頼んで、拘留所で中国人の被疑者面会をしたこともあった。また、法廷通訳を養成する学校で、刑事訴訟における法廷通訳の役割について講義したこともあるから、中国人を被疑者とする刑事事件では優秀な中国語の（法廷）通訳が不可欠なことを身をもって体験してきた。そんな私にとって、本作導入部に見るショートストーリーは極めて興味深いものだ。しかし、それは刑事事件など縁もゆかりもない一般の人には馴染のないものだから、本作を鑑賞するについてはまずそれに注目！しかし、前述のような“売り”の本作の導入部に、なぜこんなショートストーリーが・・・？

### ■□■ろう者映画が次々と！日本手話と中国手話の違いは？■□■

『コーダ あいのうた』が第 94 回アカデミー賞で作品賞、助演男優賞、脚色賞の 3 部門部門を受賞した後、私はろう者あ者と健常者の兄弟を主人公にした、マレーシア映画『ブラザー 富都（ブドゥ）のふたり』（23 年）（『シネマ 57』273 頁）を観たし、本作と同時に公開されている、手話の大切さをテーマにした『ぼくの名前はラワン』（22 年）も観るつもりをしている。また、私は観ていないが、手話によって愛を育んでいく 2 人を描いた台湾映画『聽說』（09 年）をリメイクした韓国映画『君の声を聞かせて』（24 年）も公開されているらしい。

他方、本作のパンフレットを読めば本作に登場する手話は中国手話（CSL）で、日本の観客が普段目にする日本手話（JSL）とは異なる「独立した言語」らしい。日本手話は TV や記者会見でもたびたび登場するし、秋篠宮妃紀子さまも得意らしいが、日本手話と中国手話の違いは如何に？手話の重要性は、『ぼくの名前はラワン』を観ればより明確になるはずだから、本作に続いて同作は必見！

### ■□■シャー・モー（沙漠）監督の問題意識は？■□■

それはともかく、本作のパンフレットはシャー・モー監督の「不確実な世界の中でつかめる確かなもの」と題するインタビューがあり、その最初に「ろう者の方々に焦点を当てた物語を撮ろうと決心されたきっかけは何だったのでしょうか。このテーマは、もともと監督が関心を寄せてこられた分野なのでしょうか。」との質問がある。これは私も一番最初に同監督に質問したいことだが、それに対する同監督の回答は次のとおりだ。

2020年のことですが、当時、私は一人の弁護士を取材しに行きました。その弁護士は、ろう者の方々の訴訟を専門に扱っている方でした。その取材の際、その法律事務所で働いているろう者のアシスタント、実習生のような女性に出会いました。彼女は、中国で初めて司法試験に合格したろう者だったんです。しかもそのとき、彼女は大きなお腹で妊娠している状態でした。本来の取材対象は弁護士だったのですが、私は次第に、その妊娠中の彼女のほうに強い興味を惹かれていきました。そして、彼女に対してより深いインタビューを行いました。特に気になったのは、「もうすぐ生まれてくる子どもと、どのように向き合っていくのか」という点でした。子どもに手話を教えたいと思うのか、それとも「手話は覚えなくてほしい」と願うのか。つまり、自分たちと“同じ”であってほしいのか、それとも“まったく違う存在”であってほしいのか。これは彼女個人だけの問題ではなく、多くの家庭が直面する問いだと思います。そうしたさまざまな要素が積み重なっていき、最終的にこの映画という形へとたどり着きました。

なるほど、なるほど。すると冒頭に登場する法廷通訳の女性は、7歳の娘ムームーの成長した姿！？

## ■□■母親が登場！親権を巡る裁判に！中国の弁護士像は？■□■

本作冒頭、ろう者のコミュニティの中で、父親のシャオマーと共に暮らすムームーの楽しそうな姿が登場する。そこでは、「私がないとパンはお金を稼げない」と考えるムームーが、シャオマーと雇用主らとの会話に常に手話通訳者として寄り添う姿が印象的だ。なるほどムームーがここまで父親に寄り添えば、父娘の会話はもとより、シャオマーと社会との会話も十分に可能だ。しかし、ムームーの小学校通いは？そんな心配もあるが、本作導入部は、ろう者のコミュニティの中で強い絆で結ばれた父娘が幸せに毎日を過ごす姿に注目！

ところが、ある日、5年前に離婚したムームーの母親シャオジン（ホアン・ヤオ）が「ムームーに普通の生活をさせたい」と引き取りに戻ってきたから、さあ大変。もちろん、シャオマーも今の生活がいつまでも続くとは考えておらず、将来的には親権者の変更もやむなしと考えているものの、「今すぐ娘を引き渡せ！」とは言語道断！シャオマーのそんな強い抵抗に堪忍袋の緒が切れたシャオジンは、「ならば裁判もやむなし！」と、親権をめぐる裁判に踏み切ったからシャオマーはさらに大変だ。ジャオジンは再婚しているものの、新しい夫は裕福だし、妻が連れ子連れてくることにも同意しているらしい。それに対して、

ろう者のシャオマーはムーミーを小学校にも通わせず、父親の手話通訳をさせているのだから、誰がどう見てもムーミーの親権者は母親が適任、そう考えるのが当然だ。

他方、裁判に臨むにはどうしても弁護士が必要。そして、弁護士をつけるには多額の費用が必要だ。そう言われ、それに納得したシャオマーは昼も夜も無理な仕事に従事し始めたが、本当にそれでいいの？ 弁護士歴 51 年を迎えた私は、日本の弁護士法第 1 条が弁護士の任務を「基本的人権の擁護と社会正義の実現」と定めていることに誇りを持っているが、中国の弁護士はそうではなく、弁護士業務を金儲けの手段と考えているらしい。本作に登場するシャオマーの弁護士が、わけのわからない紹介者（手話通訳者？）の言うままに金を請求している姿を見ると、それが明白だ。この弁護士は親権をめぐる裁判での勝敗の見通しや、費用の見通し等をシャオマーにどう説明しているの？ 中国ではこんな悪徳男（？）が一般的な弁護士像なの？

そんな状況下、ろう者ながら運転免許証を持っているシャオマーはカネ欲しさのため、次第に保険金詐欺らしきグループの一員に取り込まれていくことに。このグループのボスは、カネを欲しがっているろう者なら何でも言う通りの任務を果たすから便利で、安上がりと考えていることが明らかだから、かなりヤバイ。シャオマーはボスのそんな思惑どおりに危険な任務を忠実に実行していたが、そんなことがいつまで続くの？

## ■□■ろう者の協力で保険金詐欺を！両者の利害が一致！？■□■

裁判にはカネがかかり、弁護士をつけるのにもカネがかかる。日本ではさまざまな救済制度があるが、中国にはそんなものはないようだ。しかし、蛇の道は蛇！日本だってさまざまな違法スレスレの商売や、違法だけれども巧妙に抜け道をたどる商売があるのだから、中国にも当然それがあるはずだ。現にシャオマーの友人の 1 人はろう者ながら高級車を乗り回していたが、それは一体なぜ？

私は弁護士生活 51 年のうち約 45 年間は交通事故の事件を多数処理してきたが、その中には交通事故を偽装した保険金詐欺事件もたくさんあった。しかし、本作中盤シャオマーが取り込まれていく自動車修理工場を拠点とした保険金詐欺グループは規模が大きい上、ろう者を共犯者に取り込む手口も巧妙だから、それに注目！他方、途中で悪事だとわかって一度ハマってしまうと、そこから抜け出すのは困難なものだ。最近シャオマーが昼も夜も働きつめであることを不審に思ったムーミーが、ある日、密かにシャオマーの車の後部座席に乗り込んでいると、ハンドルを握ったシャオマーの車は対向車を避けようとしなかったから、アレレ！思わずムーミーが後部座席から「危ない！」と声をかけると・・・？ 幸いシャオマーもムーミーも怪我だけで済んだが、正面衝突事故の大半は死亡事故に至るはずだ。そんな体験であわやムーミーを失いかけたシャオマーは、保険金詐欺グループからの脱退を決意したが、時を同じくしてその大規模な詐欺グループは警察の手入れを受けることに。

## ■□■ムーミーの選択は？シャオマーの決断は？その結末は？■□■

日本では近時、「共同親権」の制度が導入されたため、従来の親権を巡る裁判は大きく変貌する可能性がある。しかし、それでも一貫して変わらず大切なことは、親権を必要とする子ども自身の意思を裁判官がどう判断するかということだ。もちろん、そのためには子ども自身の意見を聞くのが一番だし、それが不可欠ではあるものの、そこには幼い子供の意思をどこまで本物の意思として尊重してよいのかという難しい問題がある。

そんな悩みは日中の親権を巡る裁判で共通らしいが、本作では二者択一を迫られたムーミーが明確に母親を選択したから、母親は大喜び。あとはシャオマーがそんなムーミーの意見を尊重するのかがどうかだが、何よりもシャオマー自身がムーミーをずっと自分の側に置き、自分が親権を行使することがムーミーの幸せに結びつかないことを分かっているのだから、シャオマーがしぶしぶ（喜んで？）その選択に従ったのは当然だ。

その結果、ムーミーは今、母親とともに外国に旅立とうとしていたが、それを見送りに来たシャオマーの姿を見つけると矢も盾もたまず、ムーミーはシャオマーの元へ走っていくことに！それはある意味で仕方ないが、保険金詐欺事件の共犯者と目されているシャオマーがそこで同じようにムーミーの元へ走ったのはまずかった。それを発見した警官たちは当然、それを実力で阻止しようとする、それを振り切ろうとして暴れたシャオマーは当然、公務執行妨害罪として逮捕されることに。その結果、本作ラストのクライマックスは法廷シーンになるので、それに注目！

## ■□■刑事法廷では？悪いのはシャオマー1人？いやいや！■□■

本作ラストにみる、大量の被告人を同時に裁く中国の刑事法廷の姿は興味深い。誰がどうみても、ろう者のシャオマーは詐欺グループの下っ端だが、手話通訳を介してシャオマーが法廷で語る言葉によると、保険金詐欺事件のすべてはシャオマーが仕組んだ事件のようになっていくから、アレレ、アレレ？シャオマーはなぜそんな証言をしているの？

そう思っていると、傍聴席に座っているムーミーの周囲には、人相の悪い、いかにもこれぞ“闇グループの仲間たち”と思われる男が数人座り、手話通訳を通したシャオマーの証言を監視しているが、裁判官にはそれが全くわからないらしい。つまり、「すべての罪をシャオマー1人が認める証言をしなければ、お前の娘に危害が及ぶぞ」との脅迫メッセージが、手話通訳を介してシャオマー（だけ）に伝わっているわけだ。なるほど、なるほど。

こうなれば万事休す！私はそう観念したが、そこで詐欺グループの一員だった1人の女性が突如反旗を翻し、「ろう者のシャオマーは利用されただけだ」と真実を叫び始めるので、その展開に注目！その結果、シャオマーは実刑こそ免れなかったものの、大きく情状酌量されることになるが、それを知る前にあなたの目には涙がどっと溢れ出ることも確実だ。2026年最初の大量の涙を本作でタッピー流したい。

2026（令和8）年1月15日記